

町民海外研修 参加者レポート④ (要旨)



ロンドン郊外「ウインザー城」

歴史と規模に圧倒

田辺 敏夫

これまでアメリカやシンガポールで、まちづくりについて考えてきました。今回はイギリスというヨーロッパのまちづくりを肌で感じて考えてみたいということで研修に応募しました。また、デンマークは酪農やアデルセンで有名ではありませんが、なかなか行く機会の少ない国であり、どんな国なのか楽しみました。

最初の訪問国デンマークではいわゆる「北欧型の福祉」の現状に触れてきました。訪れた2つの施設の概要については、ほかの人たちが言及していると思いますので、ここでは感想を述べるだけに留めることにしたいと思います。デンマークでの年収は500万円程度で税負担率も50%以上にもなる。また、物価も日本と比較して安くはありません。しかし、暮らしぶりをみると驚沢ではないが豊かな感じを受けます。そこにあるのは安心感と公平さであるのかもしれない。福祉施設及び教育機関の長の話ぶりを聞いていても、国や行政に対する信頼感を感じることができ、税金の高さに対する不満も聞かれませんでした。次の一言がデンマークの現状をよく伝えているのではないでし



イギリス王立植物園(キューガーデン)

ようか。「デンマークには金持ちがそれほど多くない。しかし、貧乏な人はそれよりも少ない」。第二の訪問国イギリスではドックランズの再開発の現状を見ました。イギリスは様々な面で都市計画すなわちハードな面でのまちづくりの見本となっています。1666年9月のロンドン大火後の防火のまちづくり、19世紀中頃のロンドンなどの都市公園の整備、20世紀初頭のエベネザ・ハワードによるガーデン・シティー(田園都市)構想とその実践、そして今回訪れたドックランズ再開発は欧米の各国、アメリカそして日本で行われているウォーカー・フロント開発の先駆的な例の一つです。ドックランズの開発主体であるLDDC(ロンドン・ドック

ランズ開発委員会)は1981年に設立され、2000年の完成を目指して事業を進めています。LDDCは政府により設立され、資金は環境庁からも出ていますが、人材・資金・技術の供給は主に民間に頼っており、いわゆる第三セクターです。しかし、日本によくある三セクと異なるのは、責任と権限を付与されることも利益を出すことを義務づけられる点です。日本でも民活というところで三セクが設立されますが、権限を与えられることはなく、その結果として責任を負うことも有りません。

開発に関しての縦割りの弊害の多い日本でこそこのように開発に対する権限を集めて、効率的な開発を進めることができるのではないのでしょうか。

それから、ロンドン最終日の自由行動では仕事に関連してイギリス王立植物園(キュー・ガーデン)に行ってきました。

私は現在新津市に建設中の「新潟県都市緑花植物園」に携わっています。

キュー・ガーデンはロンドンの中心部から地下鉄で約30分、面積は約80haであり、地上で花を咲かせる植物種の10分の1以上が集められており、世界最大の野生植物を誇っています。建設中の県立植物園と200年以



ロンドンの2階建てビル

上の歴史を持つ王立植物園とは比較すべくもありませんが、その歴史と規模には圧倒されました。

ホームに入るのは反対

田辺 郁

私には初めての海外へ行くチャンスでした。研修目的が、福祉施設先進国の老人ホーム、障害者教育機関視察というので、自分もいつかは人様の世話になるかも知れない。また親もこの先すぐにでも厄介になる事は、目に見えて分かっているので自分の目で、ヨーロッパの施設を見学したいと思いましたが、私の知っている老人ホームは、巻の白寿荘へ障子張りの手伝いに行った程度で内容は分かりません。

(略)

これからは、1人2部屋の集合型施設を予定しているそうです。私は1人のおばあちゃんの後姿を見ました。ジーンズと外を眺めておられたがどこか淋しそうでした。昔からの国の決まりか何か知らないが、年寄りになるとホームに入るということには私は反対です。家族と一緒に暮らせたなら暖かきがあるのではと。ギールスコフ障害者教育施設。県立で2つの学校が合併して生徒数が6才18才まで119名、職員206名、理学療法士等の専門職員が24時間一緒に暮らしている。義務教育の9年間はこちらで暮らし、高校その他の学校も進めて、仕事をやりたい



ギールスコフ障害者教育機関

ヴェスターブロー老人施設へ視察。大野団長さんの挨拶の後、施設長さんの話になりました。デンマークでは同じようなホームは75あり、27年前に設立、入所は無料、この国は保育園、学校、病院も無料で税金の30%が社会福祉に使われている。患者1人に対し1人の介護人が付く。保育園も1人対1人の保育さんだそうで、街中を散歩している園児に同数の大人が一緒でした。入居者の半分が痴呆症の人で、リハビリ教育は自由で、この施設はまたじの出来ない人、弱い人が多く、社会復帰出来ず、ほとんどの人はここで亡くなる。

(略)

年の差はあっても8日間一緒に行動した方々とお友達になり、大変意義ある研修をさせて頂きありがとうございました。

国への信頼感

中川 春美

デンマークは、国家予算の30%を社会保障費が占めており、医療費、福祉は全て無料。75のナーシングホームがあり、経費は100%市から出ているそうです。デンマークには、親と子供と一緒に住むという考え方は

は、大体このような施設で働いている。障害度の高い人はナーシングホームへ、低い人はアパート生活をしています。施設内はあまり見学出来なかったが、いろんな楽器のあるところに案内された。日本の障害者を抱える家族のほとんどは、相当な負担を受けながらも、施設へ預けるのは最終手段であり、できるだけ家族で面倒を見てあげたいと思っているのではないだろうか。国民性の違いということもあるだろうが、国や施設への信頼感の違いというのを感じた。話は少しそれるが、現在私達は将来の為に国民年金を掛けている。しかし、私達がその年齢に達した時、実際に年金をもらえるかどうか危ぶまれている。また、病気になる時のことを考え保険にも入って備えている。将来は不安だらけだ。視察したギールスコフ障害者教育機関の校長先生が「働けなくなつた時は、国が面倒を見てくれます」と言い切った国への信頼感を羨ましく思った。ナーシングホームは、入居者の自宅であるから人に迷惑を掛けない限り、個人の自由を尊重し、好きな時に寝起きし、お酒も好きな時に飲んでよいとのこと。視察したヴェスターブロー老人施設は労働者が多い地区にあり、彼等は酒をよく飲み、入居してからもよく飲むそうです。また、PT中の女性の入居者が、タバコを吸いながら訓練



ロンドン郊外「オックスフォード」

を受けていた。日本では考えられないことである。入居者個人の希望にマッチしたサービスを与えることが大目的で、それを実現する為に、入居者一人に対し職員が一人付いており、それはまた、入居者に安心感を与えるのだと思う。それが施設への信頼感に繋がっているのではないだろうか。

(略)

国民性も歴史も全く違う国と比較にはならないが、日本は福祉の面で立ち後れていることを痛切に感じた。

国を挙げてのもっとも真剣に高齢者や障害者が住みよい社会に、そして若者も将来に対する不安のない国づくりに取り組んでほしい。そして、私達は足元を見つめ、まず自分のできることから役に立って行きたいと思う。